



**BATTLE
FUUCKERS** Vol.3+4

-JUOI- -RAINBOW MI-



「チンポバキバキにおっ立てて何期待してたんだ油親父
てめえの臭えマラしこくなんて両足で十分なんだよ！」

「うあーその臭い足の力加減が絶妙で気持ちええなあ〜」

さすが足技に自信ありやな！」

「臭いだけよけーなんだよー足コキされて感じるとか変態だなー！」

さっさとイケよー！」



「ハッー優しくしゃぶって貰えるとでも思ったかこの臭マラ野郎！」

甘噛みで感じてんじやねえぞドMが！

簡単にイッたら噛み干切るからな！」

「うっっー！なんっー雑なフェラや」

「ぶにぶにと、気持ちわりー触感だなてめーのくせー亀頭！」

ハッー苦痛で声も出ねえってか！」






ゴブ

ビュ

ビュ

ドゥル

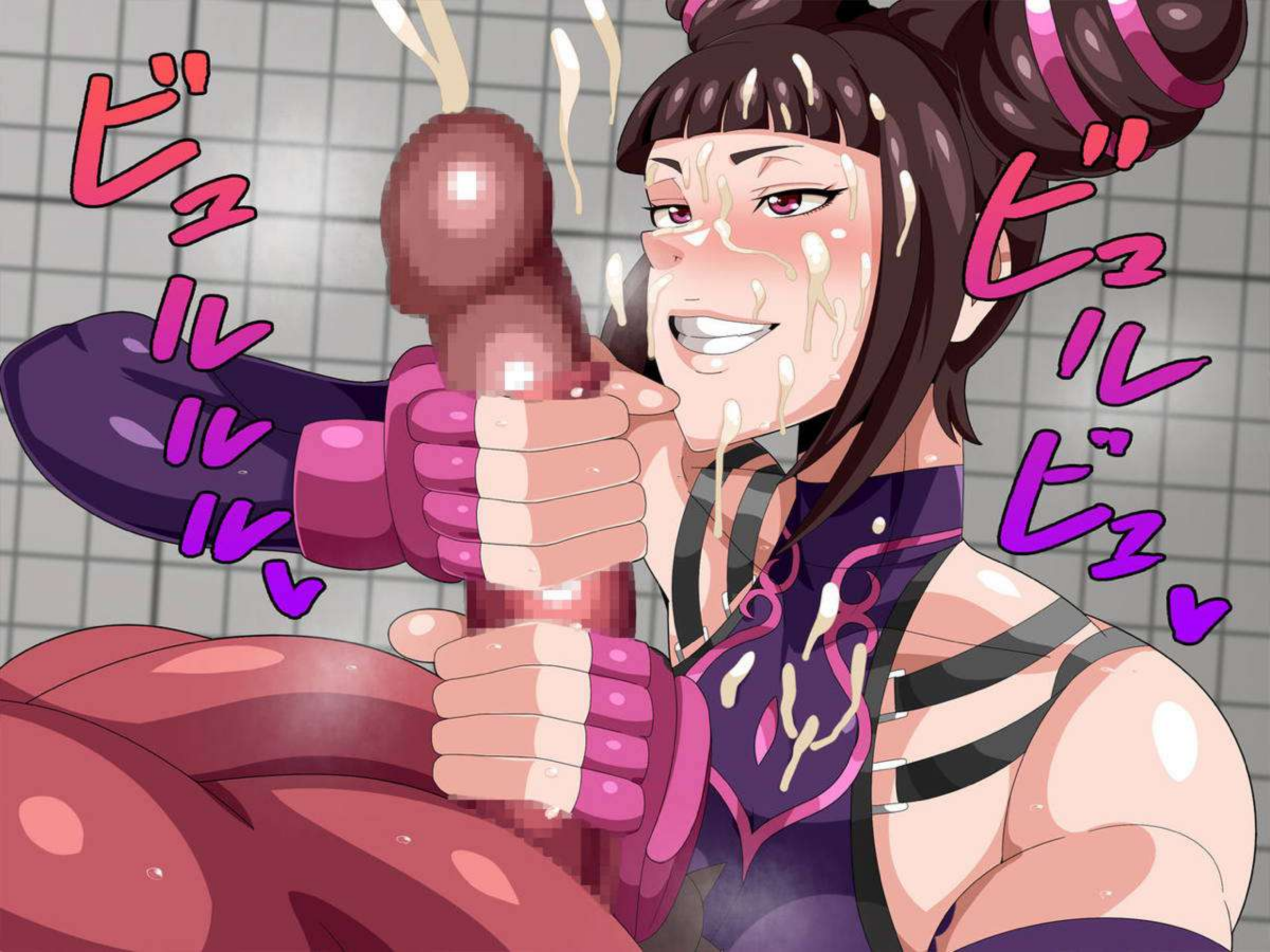
ビュ



「両手でも余裕でオーバーしやがる……どれだけデカマラなんだデメエ、
チンポばっか鍛えてるからよえーんだよ！」
しかしマジでイカくせーなこのチンポ、漏れる汁までクセー
ちやんと洗ってんのかデメエ」

「ほわあああー！」

「どうだ？イキそうか？情けねー声出してんじやねーぞ」



ト
ユ

ル
ル

ル
ル

ト
ユ

ル

ト
ユ

ル

「おら、どうだ？マタシのケツズリは？気持ちいいだろ？」

「挿入れてやるわけねーだろ？てめーはケツに挟まれてイクんだよ」

「うあああ、尻肉に食い込まれて、たまらんわー！」

「おらーケツにカ入れてヌってやんから、さっさとザー出しなー！」





ド
ビ

ビ
ビ

ビ
ビ
ビ

「ん……ほ、ほら、すっかりマタシのマン」きれいなー」

「ピチャ、ペチヨ……んちよ、じゅるるる」

「ん……ケツの臭い嗅ぎながら舐めて勃起するとかマシ教えねえな！

……しかし舐めるのはうめえじゃねえか！

社長辞めてバター犬になりやがれ！」

「ん……マン汁んまい」

「……あ、何がマン汁だ？そんなもん出てねえよ、殺すぞ」



いしやアアアア♡
♡いしや

「今度は「うちの番やでえー」

「おぶっ……でめえー何しやがる……」

んぼ、ずちゅーぐぼーぬちゅー……」

「はあくやられるのもたまらんけど、やっぱりイマラもええな……」

「ぐぼーぐぼー……」「しるすぞでめえー」

「あく姉ちゃんの喉奥の油がいい潤滑油になって、たまらん……」



トビユ♡

トビユ♡

トビユ♡



ト

ン

ン

ン

ン

「みんーみんーみんーみんー」

「あっーあっーあっーあっーあっー」

いきなりバックとが……やめるー」

「ほらほらー」「わがわがまままで馬鹿にしてたワシのチンポやでー」
気持ちええやろ

「んっーんっーんっーんっー……誰がこんな租チンなんか……」

気持ちよくなーよー」





ビュル

トビュ

ビュッ

「姉ちゃんの乳も油塗るで〜」

「ふざけんなークセー奥が取れなくなったらどっつすんだー」

「顔にもぶっかけてやるぞーワジンの特性ザーメンズッコクヤーー」

「やめる、てめえどれだけ出す気なんだーもう十分だるや〜」





トエッ

エッ

トエッ

「姉ちゃん尻でも楽しむでー!」

「あっ!あっ!あっ!あっ!あっ!」

「……てめえ、性欲お化けかよー!どんだけキン玉にザー溜めてんだよー!」

「あー!やっぱり生意気な女のアナルはよく締まるで〜!」

「そろそろ姉ちゃんも楽しんだらどうだ?本当はドエムなんやろ?」

「ふざけんな!……だ、誰がケツ穴ほじられてイクかよー!」





トビュル

トビュル

トビュ!

「あんっーあんっーあんっーあんっーあんっーも、もうやめるー……し、死ぬ」

「いい声で鳴くようになってきたな？」

「もっとワシと快楽に従順にならなアカンで？」

「あんっーあんっーあんっーわ、わかったから、

気持ちいいから、もうやめるー」

「気持ちいいなら、もっとやらかなアカンね」

「あああーやめろおおーイグー……」





ドッ

ビュッ

ビュッ!

ドッ

「どっせー油のすし」を、思い知ったか？」

「は、はひー！。わかりました」

「どや姉ちゃん。ワシのザーメン、毎日飲みたいやるの？」

「はひ、毎日飲みます。ハシ様の特濃ザーメン油、

上でも下でも毎日飲みます」

「じゃあ、最後にワシと姉ちゃんのミックス油、出してみる？」

「は、はひー！。私の中に出された、濃厚ザーマンマンロブ、見てくれ」



ピュッ

ピュッ

ピュッ

ゴォォ

























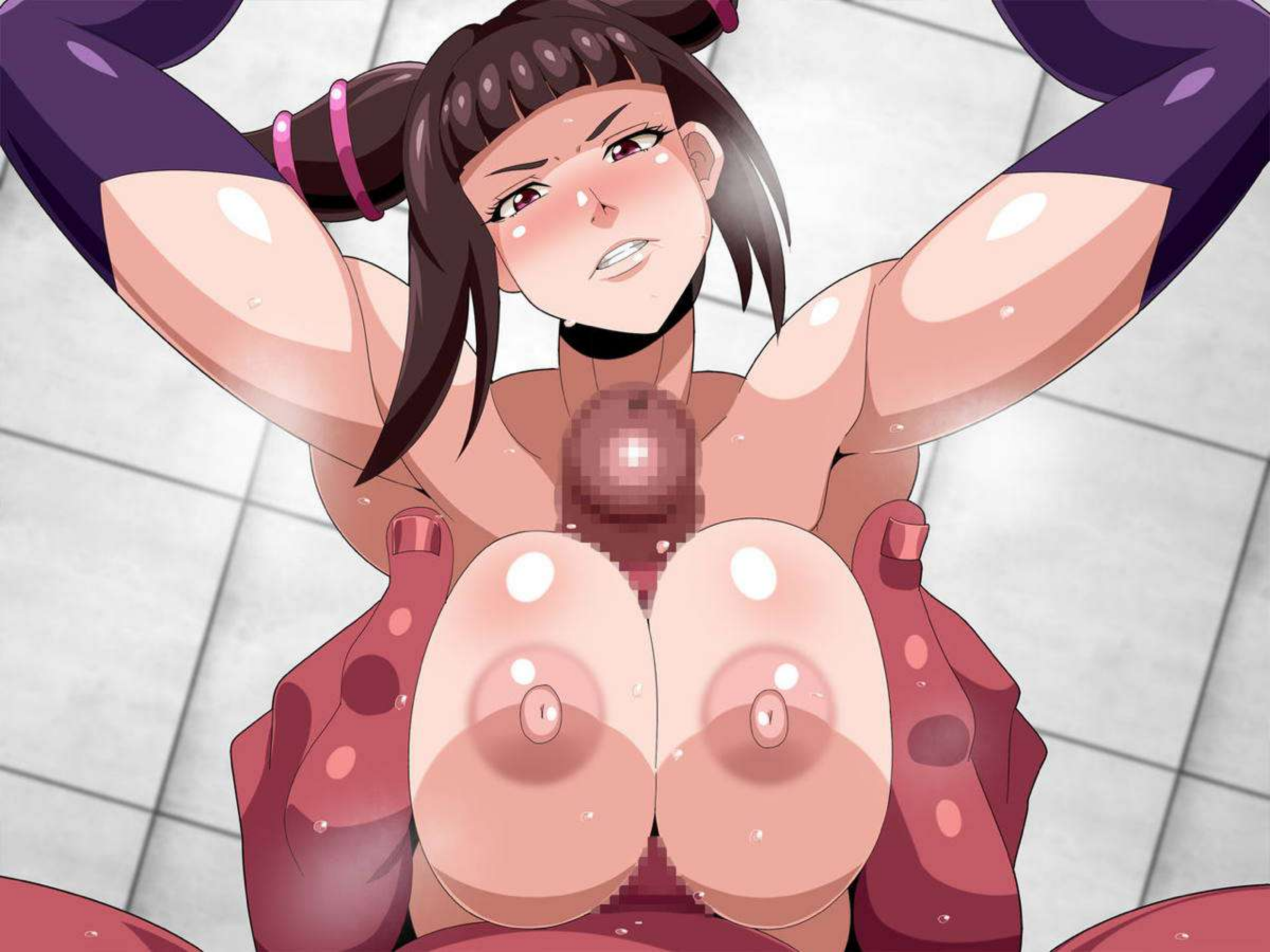




























「せ、セックスは初めてだからお手柔らかにお願いしますッスー！」

「フッ。気にするな。お前はただ無我夢中で感じれば良いだけだ」

「こ、こんな風に組みながらやるなんて、なんかプロレスみたいッスね。
……んっーなんか変な気持ちっス」

「闘いの時から思っていたが、いい体をしているな。鍛え上げてはいるが、

このデカパイやデカ尻など、しっかりと女の魅力も備えている」

「ん、ああっーそんなエッチなところばかり触らないでほしいッスー！」



トビエ

ビエ

ビエ



「ジュンジュンかっ腕には自信あるッスよー!」

「ああ、その鍛えた上腕三頭筋と胸筋の感触、素晴らしいな
「……でも、脳で擦ってほしいなんてマニアックッスよー!」

「脳なんて……汗ばかり出てきて汚いだけッス」

「さあ、「」の女の汗の匂いが興奮するんだ」

「い、いちいち変態ッスね」



トッタル!

ビュ!

ビュッ!

「ああ、これが男のチンポ……硬くて、筋肉がいつぱいつらつらで嬉しいッス」
「筋肉ではなら」

「やっぱ、り、こんな「キンキン」な「プン」するって「」とは、相当鍛えたんスか？」
「シュプーシュポーシュポー」

「ぐおおーだから筋肉では……ぐううーったないがいいセンスだ」
「シュプーシュポーシュポー筋肉から出てくる汗……おいしいッスー」





ゴホッ

ドビュ!

ドビュ!



「次は、そのバキバキのチンポとあたしの鍛えた足で勝負ッスよー!」

「うおー一足で握るよっ!」締め付けできん……やるなー!」

「うおおおー火花が出るまで高速でコいてやるッスから、

またいっぱいザーメンをポンプバーするッスよー!」



トビッ!

ビュッ!

ビュッ!



「おっぱいなんてデカくて邪魔なだけかと思ってたけど、

「うーっ使い方もあるツスね」

「いらぞ。素晴らしい乳圧だ。そのまま上下に擦るんだ」

「ん……チンポが熱くて、おっぱいが火傷しちゃうぞっす」



ビュッ!

ド'ビュッ!

ビュッ!

「うおおおーくらえーシューティングピーチー！」

「ぐおおーなんとという尻尻だ！」

ただのヒップアタックが技にまで昇華されているー！」

「どっっっつかうー」のまま寝息をせちやうっすよ……って、んーん、ん……ああーそんな変な場所、舐めちやだめっすー！」



0
↑ 3/x??? ♡

↑ 0 0 0 ♡



トッ! エッ!

エッ! エッ!

エッ!

「んっーじゅぶぶーシユポポーシユポポー」

「苦しめても絶対吐くなよ?」それがウチの軍のやり方だ」

「シユプーシユポポーシユポポーシユポポー」

「……ふあ、男の臭い、鼻に入って咽そうツス」

「くおおー頬をすぼめて……苦まで使って、」

結構余裕があるようだな」

「シユプーシユポツーシユポツーぞ、そーっふか?」

「シユポツーシユポー」





ビュ!

ドドッ!

ビュルッ!



「んんっーああっーいらっーいっー!」

「グッーやはり鍛えてるだけあって、膣がよく締まるな!」

「んんー!こんな、犬みたいなフォール決められて、悔しいの!……」

「ああっー気持ちよくて、頭が変になりそうッスー!」

「フッ。今は黙って雌になれ。俺のチンポを感じるんだ」

「んんっーああっーおまんこほじられて……き、気持ちいいッスー!」



ト"エ"ズ!

ト"エ"ズ!!

ト"エ"ズ!

「ついに裸だなー観客も大盛り上がりだよった」

「んっっーコ、コステュームは取られても、マスクは脱がないツスよー」
「オナニー」する客までいらるぞ。

お前の普段の試合もそっついで目線で見られてたんじゃないか？
「んっっーあぁっっーぞ、そんな」ど……」





トビュ!

ビュ!

ビュッ!

「ああっ！セックスって競技、プロレスに似てるけど全然違うツスね。」

「闘っているはずなのに、痛みよりも気持ちよさが勝って……癖になりそうツス」

「……ウブな女ほど虜になるのかもな」

「ああっ！セックスいい！筋肉と筋肉がぶつかって、粘膜と粘膜が擦れて、

あたしセックスに転向しちやいそうツス！」





トビッ!

トビッ!

トビッ!

「ふう……いい汗かいたッス。ん？ナニしてるんスか？」

「ザーメンをかき出さなければ、妊娠してしまうっ恐れがあるからな」

「ぞ、そうなんスか？」

「しがし、我ながらたくさん出したな」

「お前も気持ちよかったか？」

「ん………「んなに熱くて気持ちいいバトル、忘れられる訳ないッスよ！」

「鍛えなおして、もう一度闘いたいッス！」





ドグ!

ゴホオ

ビュル

グビ







